
また、会おう

紗渚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

また、会おう

【Nコード】

N1784R

【作者名】

紗渚

【あらすじ】

また会えると信じていた、信じていたのは自分だけだった…？

序章／夢

あの日、振り返りこの手で腕で抱き締めていれば何かが変わっていた？

あの日、この手で止めていれば引き留めていれば何かが変わっていた？

どちらも

もう叶うことのない理想

それは、後悔を生み出し
幸福に繋がることは
決してなかった

『惚れた女にゃ——』

|| また、会おう ||

「……………」

朝日が窓の隙間から覗く
少し肌寒いなか
俺は目がさめた

(また、あの夢かよ…)

何度となく同じ夢をみた
自分は着物をきていた
大声で笑う男と
栗色の頭をした少年と
そして、

小さく微笑む
綺麗な、女と

四人で笑う夢

前から頻繁には見ていた

けれども最近は毎日だ

内容は違えど笑っている

その女の笑顔が綺麗で

俺は見つめている

いつも、いつも……

綺麗だ、綺麗だということは覚えてる

けれど、その顔はしっかりと見えない

そしてその夢を見ると

(またか……)

俺の頬はいつも

濡れていた

>NEXT

竜章／退屈（前書き）

土方さんは中学二年生です

土ミツ要素はまだあんまりないかもです

それでもよければ

どうぞ⇒

／S a n a

壱章／退屈

「十四郎？起きてるの？学校遅刻するわよ？」

姉さんと呼ばれる
いそいで学ランをはおり
学生カバンを背負った

「行ってくる」

「行っってらっしゃい」

——バタンッ

〓〓壱章

「……………」

足早に通学路を歩く
一人で黙々と
道の端を、端を

何も考えないで歩く
それはいつも通り

見える景色にも
髪をなびかせる風にも
何も気に止めず

毎日が始まる

『私立武州中学校』

ここが俺の通う中学
昔からあるこの中学は
中高一貫校だ

しかし俺は
中学卒業後は高校にはいかないつもりだった
何故か？

学校なんてくだらねえからだよ、毎日が、だ

|| || ||

「なあ、アイツさあ」

「ムカつくよな」

誰も俺を見ちゃいない
別に、見て欲しくもない

だから

今日も俺は夢のことを
考える

『十四郎さん』

綺麗な女は
俺のことをそう呼んでいた

アイツは誰で

俺のなんなんだ

目頭が熱くなる理由がわからないでいる俺は
今、何がしたいんだ？

|| || || ||

「興味ねえから」

「…酷い」

目の前の女が泣いている
だから、なんだ
こんなこと何回目だ
勝手に俺を好きだと言い
勝手に酷いと言い

俺の何をしっている？

この女は見たこともない
名前も知らない
ソイツはもう一人の女に支えられて消えた

「…ふざけんなよ」

俺が、俺だけが悪いみたいな顔しやがって
…泣いている女は嫌いだ

鬱陶しい

邪魔

胸クソ悪い

…泣いている
誰かが泣いている

「…誰なんだよ」

壁を殴る、拳がいてえ
だが、それ以上に

胸が苦しかった

——ザッ

「…土方ア」

「……なんだテメェら」

またか

三人…いや五人

——ガッ

——ドッ

——ゴッ

モヤモヤする
胸クソ悪イ：

|| || ||

「ハア：ハア」

これも何回目だ
目の前は
倒れている三年

何が悲しくて年上大勢に囲まれにやいけねえんだ
こんなことは毎週のようにつづく
いつも通りだ

ただ今日は少し違った

「やべえ、動けねえ：」

指先すら動かねえ
青空から目が外れねえ

その青空すら霞んできた

（ああ、俺、死ぬのか）

姉さんごめん

いつも母さんのように
優しくしてくれたのに

意識は遠退いていく
途切れるその瞬間

声が、聞こえた気がする

『貴方はズルいわ』

何がズルいのか
教えてくれよ…

お前は、誰なんだ…

———プツン

>n
e
x
t

「ア
イツ
あ…?
」

•

•

壱章／退屈（後書き）

土方さんにお姉さんがいるのは歴史上の土方歳三さんにお姉さんがいたからです

（ゝ・ω・）

さて次回は

ミツ、ゴリ、サド、ザキ

ギン、シン、グラの

誰かがでてくるよ☆（

うん、多分

（ゝ・ω・）ドーン！！

／S a n a

◆／苛立（前書き）

ちよつと

読みづらい部分があります

m
〔
m

S
a
n
a

◆／苛立

「――あ――!!」

どこからか人の声がする
確か…俺は死んだんじゃないか？

目をそつと開くと
そこには俺ひとり

死んでない…か

周りを見渡せば、そこらじゅうに竹刀や防具…
どうやらここは剣道部の部室のようだ

「――っ!!」

傷が痛む

「あー…ちくしょ、アイツ等本気で殴りやがって…」

少し汗をかいたようだ
拭き取ろうと右手を頬にあてた時に気が付いた

「……………」

手当てがしてあった
よく見ると手だけではない

頭から足先まで完璧にケガの手当てがしてある

「……チツ……」

中途半端な親切はやめて欲しかった
こんな経験は何度かあった
が、どこも拾ってきた人間が俺だと解った途端に

『起きたんなら帰れ』

の一点張りだ

どうせまた追い出される
それなら自分から出ていった方がいい

身体中に響く激痛に耐えながら重い身体を起こす

「…っ!!…」

立ち上がった
と思った瞬間に
右足が折れた

——ガクッ

「っ!!」

それと同時に部室のドアが開いた

「オイッ!!」

——ガッ

…俺の身体は床に倒れることはなかった
目の前の男に支えられているからだった

「ふう…大丈夫か？」

「……………ああ」

男は気前のよさそうな顔でそう言った
見る限り三年だろう
俺が誰か知らないのか？

「お前が土方か？」

なんだよ知ってたのか
ならば早く追いつくならなんなりしてくれ
俺は早く帰りたいんだ

俺は一度として男と目を合わさずにいた
そしてため息をもらす

「土方、」

ほら早くしろ

次の言葉を予想していた俺は男の言葉を聞いて
拍子抜けした

「お前、剣道部に入らねえか！？」

「…は？」

「いやよ？土方十四郎だろ？お前、え、違う？」

「いや、そうだけど…」

「小学生六年間ずっと剣道やってたらしいじゃねえか！！強いんだろ？」

「……………」

確かに小学生六年間剣道はやっていた
それなりに大会でも優勝経験がある
けれど中学にあがると同時に剣道はやめた

両親が海外にいつてしまい
姉さんが家に一人になってしまうからだ

しかし、その事を知っていて今の俺のことを知らないのか：

「今、部員が少なくて困ってんだ！！頼む！！剣道部に入部してく
「断る」……」

剣道はやめた
それに俺が入ったところで部員はもつと減る
減るに決まっている

「俺は、仲良く部活なんてごめんだ」

「あ、オイ！」

無理矢理立ち上がり
部室をでていった

――ボタン

|| || || || || || || ||

家に帰り部屋に入る鞆を放り投げて
ベッドに倒れ込んだ

「……………」

ふと、

一本の竹刀が目に入った
俺はそれに吸い寄せられるように竹刀を手取る

すると妙にしっとりきた
胸の辺りが熱くなるのを
静かに感じる

「……………」

ひと振りする

——ヒュンツ

何かが、足りない
そう思った俺は
竹刀片手に家をでた

近所の公園に来た
珍しく子供が一人もない

俺は竹刀を握り直した
そして構える

「…フー…」

深く深呼吸をする
ヒュッとひと振り
風を切るその音は確かに耳に残り
そしてまた、頭をよぎる

『あまり…無茶をしないでください…』

女の姿

「おい、土方アてめえさつきはよくも…」

静かな夜に夢げに
そう、花のように笑う
そんな女だ

「オイ聞いてんのか!?!」

だけどソイツが泣いている?
涙を拭うことは出来ず
俺はひとり立ち尽くして

何もできない

「デメエ!」

「うわあああああああああああ!?!」

「!?!」

狂ったように叫ぶ

―ワカラナイ

―解らないんだよ

目の前の男達は

次々と倒れていた

―なんなんだよ

―俺には

―なにかが足りない

人を竹刀で殴る

いや、それは

”斬る”の方があっているかもしれない

―追い掛けても

―その答えは

―遠ざかるばかりだ…

身体に響く痛みは

確かに残っている

「やめてくれ！！わかった！！わかったから！！許してくれよ
お！！！」

しかしそれに

その痛みは俺にとって

なんの意味もない

―誰かの声が

―響く

目の前の男が何か言っているが、どうでもいい
手ににぎる竹刀は

既に凶器となり

俺は振り降ろそうとした

―この苛立ちが

―消えるなら

―コイツが

”死んでも構わない”

――ヒュッ

「ヒイツ!!」

――ガッ

「……？」

止められた

それは俺の握っているソレと同じで
それを握っているのは

「てめえ…さっきの」

「竹刀、は…人殺しの、道具じゃ…ねえっ…！」

竹刀はガチガチと震えている、相手と俺の差は歴然
弾き飛ばそうとした瞬間
怯えていた男は逃げた

「ひいひい！！！」

ソイツを目だけで追い
竹刀を緩めた

「チッ…邪魔してんじゃねえよ…」

「はあ…やっぱお前エ強エなあ…！」

まだだ

まだ苛立ちはやまねエ

”コイツで、いいか”

竹刀を振り上げた瞬間
ズキッと頭が痛む

「…！？ツ…アアツ…！？」

「？…オイ！？」

頭に響く

俺は本能的に竹刀を投げた
身体が訴える

”この人を斬る訳にやあいかねえ”

と

|| || || || || || || || || ||

『トシ…まだ傷がなおってないんだ無茶するな』

『言わんこっちゃねえ!!大丈夫か!?!』

『俺がいなくてもお前がいれば…せん…みは安泰だ』

『トシ!頼んだぞ』

『お前以外に誰が——でいるってんだ!!』

|| || || || || || || || || ||

「…なあ…何があったか俺は知らねえ…聞こうとも思わねえ…」

男は竹刀をおいた

そしてゆっくりと俺をみた

「ただよ…お前エは耐えてて辛くねえのか?たまにはさらけ出していいんだ」

男は立ち上がった

そして大きな手を

俺の頭に乗せて撫で回す

「…俺は、お前の味方で仲間だからなっ!」

ソイツの笑った顔は
夕日にあたって
暖かった

いつ仲間になったんだよ
とか

色々言いたいことはあったけれど

俺の頬にあたる熱いものが

そんなこと、どうでもいいだなんて思わせた

「……アンタッ…変わってるよ…ッ」

「よく言われるさ」

俺は結局

味方が欲しかったんだ

「俺は三年の近藤勲だ、よろしくな、」

ゆっくりと

手を差し出された

「トシ」

俺はその手を
ゆっくりと見た

「…ああ
」

—パシッ

・

『十四郎さんは近藤さんのことを本当に信頼して尊敬しているのね』

『別に…』

『ええ！？ ひでえぞトシ！！』

『ふふっ、意地っ張りなんだから…』

『…うるせー…』

>next

◆／苛立（後書き）

うわああああああああああああ！！

はい、土方くんと同じ感じで叫んでみました

本当にお久しぶりです…

スイマセン！

受験終了そして

テスト終了

更新も進む予定だったのですが…

予想外に卒業式準備が忙しく更に高校入学準備も

只今忙しくなりました…

なるべく

頑張って更新しますので

見捨てないでくださ（ー

さて物語解説ですが

相も変わらずミツバさんでてこねえええ！！

近藤さんを一番にだすのは予定していたんですけど

やっぱり少し出しゃばったこのゴリラ

まあ土方さんの尊敬する

ゴリ…げふんごほん！！…局長だからしょうがない（

さてさて

漸く侍時代の自分を思いだし始めた土方くんですが
やはり

竹刀を握ると血が騒ぎ我を失ってしまいます

そんな彼に剣道部副主将は務まるのか！？

でわまた次回会えることをねがって…

土「つーか俺、副将なのか？いつ剣道部入るつつった？」

近「入んねえの！？」

S a n a

◇／先輩

「みんな！新しい仲間だ！仲良くしてやってな！！」

背中をバシッと叩かれた

ここは剣道場

昨日のあれから

俺は剣道部に入ること承諾した

まだ傷が痛むというにもかかわらず

『明日から…行く』

と、自ら言った

この男の…いや

近藤さんの顔を見ていたら

思わずそう言ってしまったのだ

「：コイツ土方じゃね？」

：だが、まあしかし

近藤さんが珍しいすぎたぐらいで

俺のことは知っている奴は

沢山いる

知っている奴らは

全員が全員思うだろう

” 本当に大丈夫なのか”

と

「ただの不良に剣道ができんのかよ…」

「俺たちの場所あらさねえでくれよな…」

ボソボソと

俺を叩く声をする

聞こえないとも思ってるのか？コイツらは

こんな時、前ならすぐに手が出ていたが

もう暴力はやめると決めた

何に決めたのかは、わかんねえけど

とにかく

一瞬拳が出そうになったが
ギリギリで止めた

そもそもこんなでけえ奴らにかかってこられたら
流石に耐えられねえからな

「じゃあ練習開始!!」

「ウツス!!」

近藤さんの掛け声と共にわらわらと部員たちは別れ
各々で練習をはじめた

「俺は何すりゃいいん……で、すか……」

「ワハハ!無理しなくていいんだぞ!」

そして頭を撫でられる

近藤さんはでかい

三年の中でも特にでかい

180位はあるだろう……

俺はまだ170に届かない
成長期だ

ちょうどいい高さで頭を撫でられるのが悔しい

「そうさなあ…まだ傷も痛むだろう」

「…いや…まあ」

「お前は今日は見学だな」

少し納得はいかなかったが
仕方なく端で見ていた

——バシッ！！

——バシィッ！！

響く竹刀の音に
身体がウズウズする

「……………あ」

一人、目に留まった
少ない部員のなかで
誰とするわけでもなく

黙々と竹刀を振るう男
おそらく同じ年だろう
眼鏡をかけていて頭脳派に見えるが
その剣筋は真っ直ぐだ

ソイツを見ていたら
いきなり三年に声をかけられた

「オイ」

「?なんだよ」

「なんですか? だろ」

めんどくせえと思いつつ
言われた通り言い直した
すると

「練習おわったら顔だせ」

そう言って

もとの場所に戻り
練習するわけでもなく
ふらふらとしていた

(なんだアイツ…)

首を傾げ

もとの視線に戻すが

眼鏡のアイツはもういなかった

II

「ありあとあつしたアア！」

無事練習は終わり

着替えを済ます

そして着替え終わって

思い出した

（あ、先輩に顔ださねーと……）

名前も知らない先輩に話し掛けにくい
正直ダルいがない

「…つとあの先輩は…」

更衣室には既にいなかった
忘れて帰ったのだろうか

それなら好都合と
下駄箱に向かった
そこでガツクリする

「あ、土方くんおせーよー。この島崎先輩を待たすとはなにごと？」

「あ、スイマセンっす…」

適当に頭を下げる
先輩からは清涼スプレーの匂いがする
あまり俺が好まない

思わず鼻をおさえようとしたが止めた

「さっそくで悪いんだけどさ…」

「…ナンスか」

肩を組まれて
異常に近い距離で話される

「金、貸してくんね？」

「……………」

金か、

くだらねえと

聞こえないように小さく
溜め息をひとつ

「ムリッスね」

「そんなこと言うなよ」

「ムリですよ」

何度か言い合っていると
教師が一人やってきた

「何やってんだお前らァ、はやく帰れ。オジサンの仕事増えちゃうでしょ」

それん見ると
島崎とかいう先輩は

舌打ちを小さくして
帰っていった

「なんだったんだ…」

|||||

…次の日

今日は授業にちゃんと出た。ちゃんと出たから先生がびっくりして
いて、それが嬉しくてよかったなあと思いました。明日からもちや
んと行こうかなあと思いました。

アレ？作文？

「え、今日部活ねえのか」

「ああ、わりいなトシ」

「いや…良いけどよ…」

と、言うわけで
俺は午後の予定がなくなったのだった
そのため荷物は家に置き

竹刀だけ持って公園にでかけた

「ふー…」

なんだか素振りをして
休憩をしようと公園の端にあるベンチに座った
その時だった

「…勘弁してください…」

「いいだろ？ 別によお」

公園に2人武州校の男子生徒が入ってきた
片方は見たことのある奴だった

（島崎…？）

もう片方はいかにも気弱そうな…おそらく一年だろう
どうやら俺には気付いていないようだ
このベンチはちょうど影に隠れている
見えないのだろう

そして島崎は

また金を後輩から巻き上げているようだ

「いいからだせよ」

「やめてくださいい」

「いいからっ」

島崎の声が苛立っているのだとわかるが、関わるとめんどくさいだろうと俺は見ているだけだ

「はやくだせやっ！」

「ひい…」

そろそろ一年が泣きそうだとするとその時だった

苛立ちが頂点に達した島崎は片手の竹刀を振り上げた

そして一年の鞆にむかって降り下ろした
そのまま鞆は地面に叩きつけられる

「ひい…ッ」

「だせよ…」

もはや金が目的ではなくなっていた

奴の目をみた瞬間

俺の身体はバネのように勢いよく動いた

あのままだと

竹刀が神聖な竹刀

” 剣が汚れる ”

と思ったからだ

———バシィッ！

その大きな音ほど

島崎のひとふりは全く重くはなかった

よく、覚えていないが

睨みつけ、ひとつ呟くと島崎は涙目で逃げていった

「失せろ」

一年の鞆を拾い上げ
渡してやる

「ほらよ」

「あ、ありがとうございます!!」

一年は勢いよく頭を下げた
目がキラキラしているのは気のせいだろうか…

「あ、あのっ! 剣道部ですか?」

「あ、ああ…まあな」

「名前とか聞いていいですか!？」

「……………土方」

「土方さんですかあ!」
とキラキラしている一年
質問を何個か受け
適当にながし

帰ることに

別れる瞬間

アイツは大きく手を振っていた

「変なヤツ…」

|| || || || || || || || || || ||

…また次の日

「えーみんな、新入部員がきたぞー！」

「よろしくお願いします!!」

ソイツは昨日の
まさしく一年だった

「おまえっ…！」

「あっ！土方さんっ!!」

「おまえ…まさか…」

「土方さんに憧れて剣道部に来ちゃいました」

えへへ

と頭を照れるようにかく
憧れた、なんて
アホだコイツ……
と思いまた溜め息

「おまえ……」

「はいよっ！」

「名前は？」

「山崎退ですっ！」

>
n
e
x
t

◇／先輩（後書き）

うっほい

お久しぶりです

テスト三日前の作者です

（っ、A、）っ

今回は山崎くん登場☆

私のなかの山崎は土方さん大好きです

尊敬するお兄さんです

今回さりげなく

土方くん成長期情報ながしました（、D、）

中学と高校の間でグリーンと伸びるよきっと。
心配しないでね土方くん☆

でわまた

お会いしましょう

S a n a

◆／後輩1

「土方先輩！土方先輩！」

どこにいても

ヒョコヒョコと後ろをついてくるコイツは

何度「ついてくるな」

と言っても止めようとはせず言うことを聞かない

今日も毎時間

休み時間のごとに

俺のもとにやってきて

俺の名前を連呼する

そしてその度に俺も言う

「土方先輩！昼飯一緒に食いましょうよう！」

「断る。帰れ」

そして

その言葉を聞くと

コイツはガツクリと

肩を落として、

自分のクラスに帰っていく

「・・・また部活でな」

「……………！！、はいっ！」

そう一声かけただけで

コイツはすぐに笑顔になり

スキップして帰るのだった

「…変な奴……」

…迷惑だとは思っているが
でも、前まではなかったこの日常に
なんとなく”嬉しさ”ってやつを…

「……って、なに考えてんだか…恥っず…」

アイツ…山崎退は
あの日公園で
島崎に絡まれているところを
俺が助けて以来

異常に俺に着いて来るようになった一年生だ

剣道部にまでついてきた
山崎は剣術経験がないらしく
竹刀をブンブンと振りまわすだけで
危なっかしくてしょうがない

「今日も素振りだな…」

…放課後

「…こうですか？」

「だから、違って…腕だけで振ったんじゃ意味ねえんだよ…こう…」

俺は近藤さんに

当分は怪我もあるから

山崎の指導をするようにと頼まれていた

「…ハッ…フッ…」

「いいじゃねえか、飲み込み早えな」

「…ふう…本当ですか!？」

最初こそ危なっかしかったが
山崎は覚えが早かった

「初心者にしては、な」

「そうですよね〜:」

山崎は笑いながら

「はやく土方先輩くらい強くなりたいですよ!!」
と竹刀を振り上げた

「土方くらいね〜?」

「・・・?」

すると

後ろから野太い声がした

「おい一年、いいこと教えてやるよ」

コイツは

おそらく俺と同じ2年の男

俺を忌み嫌っている奴の一人だ

この男は

ニヤニヤしながら

山崎に話しかける

「いいこと・・・?」

山崎はびくびくとしながら
男の言葉に耳を傾ける

「お前の大好きなヒジカタセンパイはなあ、このへんで有名な不良君で誰触れ構わず相手を血だらけにする、最低の野郎なんだぜ？そんな奴に剣道教えてもらうなんて、お前残念だったな。ソイツは喧嘩は強エかもしれねえが剣道ができるわけねえだろ？」

「……………」

山崎が黙る
竹刀を強く握りしめ
小さく震えていた

俺は…
この男の言っていることを
否定するわけでもなく
ただ、黙っていた

実際、喧嘩をしていたのは
事実なのだから

「なに黙ってんだよ？聞いてんのか？」

「……………」

「あ？なんだって？」

「……そんなわけない！！」

「……………あ？」

正直、驚いた

山崎は一瞬顔を青くしたが

すぐに男を睨み付け

訴えるように

こう言い放った

「先輩は強いんだ！俺を助けてくれた！アンタなんかより全然強いんだからな！ここにいて誰よりも…一番強いんだ！！」

それを聞いた男は

喉を鳴らして笑う

剣道場内にいる部員の視線が

全て俺達3人に注がれる

「ククッ…バカか、一番なわけないだろう？俺はこれでも副主将なんだぜ？」

「絶対一番だ！」

「ほお…なら証明するか？」

「望むところだ!!」

なにやら

俺を置いて話が進んでいく

「ちょ…まてお前ら…」

「来週の練習で証明してやるんだからな!!」

「いや…だから」

「…楽しみにしといてやるよ」

いや、だからお前ら…

勝手に決めてんじゃねえよ…

俺の初めての後輩は

どうやら頭が回らない

感情任せな野郎だったらしい…

「…………ハッ！」

「お前なあ」

「す、すいませんんんんんんんんんんん!!!」

>next

◆／後輩1（後書き）

ぬっはぁ…お久しぶりです…

山崎かわいいなぁ…

と最近常々おもうサナです

最後に更新したのいつだっけえ？
うっはW W W 忘れたW W W

〓次回予告〓

なんやかんやで
強さを証明することになった土方
それまでに
なまった体を鍛え直そう

…と山崎に言われていた
くだらないと考える
そんな土方の前に現れた

どこかで見たことのある
やわらかい香りの髪の持ち主とは…？

次回⇒◇／後輩2

◇／後輩2

「はあ？ 修行だあ？」

次の日の昼休み

俺は教室で

姉さんの弁当を食べていた

すると突然、

山崎がやって来て

修行をすると言いつ出した

「お、コイツが例の後輩くんか？」

「あ?…ああ…まあな」

「?どなたですか?」

「ああ、俺は土方と同じクラスの原田だよろしくな。山崎くん」

近藤さんと

同じくらいの身長

スキンヘッドが特徴の原田

つい昨日仲良くなった

「ちなみに、お前と同じ剣道部なんだけどな」

「え!?!あ、スイマセン!!!」

「ハハ、ホントに土方の事しか見えてねえんだな」

2人の談笑をよそに

俺はまた一口

弁当のおかずを食べる

修行なんて

そんな面倒くせえもん
したくないはない

だから何事もなかったように流した

山崎は原田と話し終わると
自分が何をしに来たのか
忘れたかのように

「じゃあ先輩また部活で！」

と言って帰って行った

「…元気だったなあ」

「うるせえだけだろ」

「ははっ、そうだな」

食い終わった弁当をしまい
次の授業の準備をする

すると原田が意外そうな顔をする
なんだ、という顔をすれば

俺が真面目に勉強するのが意外だったらしい

まあ、そう思うのも当たり前か

「ん？これ…」

「ペンケース？誰のだ？」

「もしかしたら、山崎君のじゃねえか？」

「はぁアイツは…」

そそっかしい山崎は

ペンケースなんてデカイ物を余裕で忘れたようだ

「届けてやれば？」

「は？なんで俺が…」

「大事な後輩君なんだからよ」

「…チッ、めんどくせえ…」

ペンケースを手に取り
立ち上がる

昼休みは残り20分

山崎にペンケースを渡す

1年の教室は

ざわざわとしていて

騒がしい

そんななか

ひとり窓際で

外を眺める奴がいた

「……？、アイツどこかで……？」

その時

一つ風が吹いてきた

——ザア……——

一瞬

ほんの一瞬だけけれど

「……ッ……」

”懐かしい”香りがした

『十四郎さん』

———ズキッ———

頭に響くと同時に
魂にも響く

姿を見ようとしたが
それは鐘の音によって
遮られた

「先輩！授業始まっちゃいますよ？」

「あ、ああ……」

気のせい
だったのだろうか

一瞬の香りも
懐かしさを覚えた
窓際にいた奴も

もうそこにはなかった

[illegible]

∴
放課後

「で、土方よお」

「なんだ？」

体がなまってきたため
原田と打ち合いをしていた

今は休憩中だ

「来週のアレ、どうするつもりなんだ？」

「∴証明ってやつか？」

特に考えていなかった
と、いうのが本音だ

さっきまでは
かろうじて覚えていたが

あの懐かしさが忘れられず
すっかりそのことは
頭から消えていた

「オイオイ、大丈夫かよ」

「ま、なんとかなる」

「これでも期待してんだぜ？俺」

どーだか、と笑えば
原田も笑った

それがなんだか
むず痒かった

|| || || || || || || || || ||

そしてその日がやってきた

——ざわ…ざわ…

「オイ、なんだこの大勢の観客は…」

「あの…スイマセン…」

「山崎…おめえの仕業か？」

「いや…俺っていうか…その…」

剣道場は

人で埋め尽くされていた

その中には

今まで俺がボコッ…

倒してきたやつや

振ってきた女や

それ以外にも

学年関係なく

多くの生徒がいた

山崎は
自分ではないという

「じゃあ、誰が…」

「おしゃべりとは余裕だな土方君よお」

竹刀片手にやってきた男
名前がなんだったか
そんなことは覚えてない

覚える気も
ないが、

「アンタも余裕そうじゃねえか」

「フン、ま、お前相手じゃな」

俺も竹刀を取り
1、2回振り
肩慣らしをした

「早く始めようぜ、面倒くせえ」

「…チツ…ああ、」

———両者構えッ！

「いいか？お前生意気なんだよ、ポツと出の不良が主将に気に入られたからって、竹刀もろくに扱えないんだろ？お前なんかなあ…」

———ヒュッ

———パンッ

「…それだけか？」

まだ、

自分に起こったことが
解ってないらしい

もう少し

楽しめるかと

思ったがな…

「…めっ、面ありっ！勝者土方！」

シンと張りつめた空気

審判の判定によって
場内は歓声に包まる

「今の見たかよ！？」

「見えなかったー！」

「あれ副将だろ？あんな簡単に負けんのか？」

副将らしい男は

自分の状況がようやくわかったらしく

膝から崩れ落ちた

「そんな…まさか…」

奴には

誰も近寄らなかった

「いやーすげえなあトシ！」

「別に…」

近藤さんは笑いながら
肩をたたいてきた

原田と山崎も同時に近づいてくる

「先輩さすがです!!!」

「これはアイツよりもすげえんじゃねえか？」

「…アイツ？」

俺が疑問符を浮かべると
原田は「ああ」と言っ

「1年にな、すげえ強え奴がいるんだよ」

「…へえ…」

「アイツは幽霊部員みたいなもんだから滅多にこねえけどな！」

近藤さんは笑って言う
いや…それはいいのか？

その時だった

剣道場の入り口から
風が入ってきた

”懐かしい”女の香り
を乗せて

「!」

咄嗟に振り向くが
そこには女ではなく

「幽霊部員はひでエなア」

夢の中の
あの女に似た

少年が立っていた

<next

「今日はちゃんと来やしたぜ？ 近藤さん」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1784r/>

また、会おう

2011年10月6日13時56分発行